



## 身体性を大切にしたい異文化理解教育の試み 「国際理解とコミュニケーション」

国際学部 孫 美幸



京都府出身。2010年に博士号取得。研究テーマは、日本と韓国の平和教育・多文化共生教育。子どもの全的な存在に関わろうとするホリスティックなアプローチを重視している。2019年に本学国際学部国際理解学科に着任し、多文化共生社会や異文化コミュニケーションに関連する科目を担当する。  
(そん みへん)

国際学部国際理解学科の専門科目の一つである「国際理解とコミュニケーション」は、毎年100名を超える受講生が履修する科目である。週に2回30コマの授業を教員2名で担当している。本稿では、2020年度の身体性を大切にしたい授業での取り組みについて、コロナ禍のオンライン授業が充実したものとなるようにどのように実施したのか、学生たちのコメントと共に紹介する。

### 1. コロナ禍のオンライン授業での学生たちの様子

2019年度国際学部に着任して実感した学生たちの長所の一つは、身体性が豊かであることであった。プレゼンテーションの際、自然と歌を口ずさみ、パフォーマンスをする学生たちもいたのに驚いたのを覚えている。

2020年度コロナウイルス感染拡大に伴い、本格的にオンライン授業がスタートした。初年度に実感したような国際学部の学生たちの良さをどのように伸ばしていけるかという模索が続いた。学生たちの長所である豊かな身体性が、どんどん委縮していくのが容易にわかったからである。

そのような中で、学部共同研究の一環として、異文化理解教育をテーマにした授業方法の検討を行う機会に恵まれた。学科を越えてそれぞれの領域から異文化理解教育と身体知を重視したアプローチを検討し、試験的にいくつかの授業実践にチャレンジすることができた。

### 2. 異文化理解～「自・他の変容」に必要な身体感覚をどのように学ぶか。

異文化理解において、多様な背景をもつ人々と対話することは重要なスキルであり、その前提として柔軟に開かれた身体性を意識することが不可欠である。オンライン授業のコミュニケーションでそのような豊かな身体性をどのように取り戻すことができるだろうか。

「国際理解とコミュニケーション」の講義で2020年11月と12月に、ゲストティーチャーと連携した授業を実施した。ここで工夫したのが事前課題とリアルタイムオンラインの授業を組み合わせることであった。オンライン越しのコミュニケーションは、画面の前でずっと座ったままの姿勢、または画面を消したまままだと表情すらわからないという、一瞬で消えていくコミュニケーションである。そのため、事前課題として身体性をある程度意識して過ごしながら授業に参加することで、臨場感を伴った身体感覚をオンラインでも保持できるのではないかと考えた。

### 3. ゲストとのコラボレーション授業の概要と学生たちのコメント

本稿では、初年度の対面授業でも来て頂いたタイ出身のプラー・ポンキワラシン氏とのコラボレーションについて紹介する。

プラー氏は、日本とタイを往還しながら在住外国人として外国人支援のNGO活動にも関わるなど、多様な文化背景をもつ人々と共に生きる工夫についてわかりやすく伝えるプロである。

11月初旬「多文化を体験する1週間」という下記のような事前の体験課題を出した。

「タイは仏教徒が多い国で、日常生活の中に仏教に基づく習慣が多くあります。今回はみなさんにまず多くのタイ人が行っていること、心がけていることを1週間ほど、体験していただきたいと思います。

#### ①瞑想

- ・1日1回、1回5分程度のお時間を取ってください。
- ・起きた直後、または就寝前にできる限り周りに音がない状態で、瞑想をしていただきます。
- ・楽な姿勢で、あぐらをかいても、椅子に座って両足を床につける状態でも大丈夫です。
- ・両手の手の平を上に向けて重ね、親指同士をくっつけておく。
- ・目を閉じて、ゆっくりと息を吸って、ゆっくり吐く。
- ・可能な限り、何も考えないように無の状態にする。(頭にいろんなことが浮かんでもあまり気にしなくて大丈夫。)

#### ②誰かのために何かをする。

- ・1日1回。できない日があっても問題はありません。
- ・ご家族等と同居している場合はご家族に、ひとり暮らしの場合は友人や出会った人などに、役に立つ行動、思いやりのある行動、喜んでもらえる行動などをしてください。それに対する見返りを要求したり、期待したりしないでください。」

その後、アンケートを実施し、オンラインのゲスト講義の際に振り返って頂いた。講義では、日本の暮らしの中で東南アジア出身、タイ人としてのアイデンティティを隠すようになった体験、NGOでの活動、タイにおける仏教

文化のことなどを語って頂いた。事後アンケートでは、事前課題の実践がゲスト講義の内容を理解する助けになったという学生たちが9割を超えた。学生のコメントは下記の通りである。

・事前課題の瞑想に関しては、タイ人のおおらかな性格や輪廻転生という考えを理解するのに役立ったと思う。瞑想に対して、日本では宗教的意味合いが強く、少し抵抗があったが、実際にやっていると心が落ち着き、日々の生活がいかに忙しいものであるかを実感した。そして、私たちが考えている時間の概念がタイとは全く違っているのかもしれないと講義では学ぶことが出来たので、事前課題は必要だったと思う。

### 4. オンライン授業と対面授業が交差する2021年度を迎えて

2021年度に入り対面授業が再スタートし、オンライン授業の効果的な部分を取り入れつつ新たな試みにチャレンジできる貴重な年であると思う。昨年度の共同研究実践に関わった先生方や新たな先生方とも連携して、秋に領域を越えた国際学部の異文化理解教育実践をテーマにしたシンポジウムを実施する予定である。学生たちのプレゼンテーションも交えて実施する計画であり、国際学部の学生たちの良さがさらに引き出せることを楽しみにしている。

なお、本稿は2020年度国際学部共同研究「国際学部における異文化理解教育刷新に向けた授業方法の検討「身体知」に着目して」の成果の一部である。

